

びわこ文化公園植物だより〔β 版〕

## 野生のスミレ類 スミレ科



公園内にみられるタチツボスミレの群生

春はスミレの季節。日本はスミレ大国といわれ、野生のスミレ類が 50～60 種もあるとされています(研究者により見解が少しずつ異なります)。私たちはびわこ文化公園内でこのうち8種を確認しています。このスミレは何スミレ?と気になる方もいらっしゃるでしょう。ここでまとめて紹介してみたいと思います。

スミレ *Viola mandshurica*



上に何もつかない、ただのスミレです。ほかのスミレ類に比べて花がやや大きめ、色も濃いめの美しいスミレです。草地に生えることが多いですが、アスファルトのすき間に列になって生えることもあります。



花の中心部の色が闇のように濃いものはミョウジンスミレと呼ばれることがありますが、種としてはスミレのうちにはいません。「色彩変異」とよばれるものです。

アリアケスミレ *Viola betonicifolia* var. *albescens*



花が白いほかはスミレによく似ていますが、単なる白花のスミレではなく、別種になります。花弁に網目のような紫色の筋が目立つものもあります。

ノジスミレ *Viola yedoensis*



花弁が薄くてへりが細かくちぢれ、いつもしおれかけのように元気なく見えるスミレです。ただのスミレにくらべて路傍など地面が露出したところを好みます。

ヒメスミレ *Viola inconspicua* subsp. *nagasakiensis*



ただのスミレをミニチュアにしたような極小のスミレです。歩道のへりやアスファルトのすき間によく生える、都市環境にも適応したスミレです。

シハイスミレ *Viola violacea*



葉の裏が紫色なので「紫背」。花は赤味の強い紫色です。雑木林の下や周辺に生える、山地性のスミレです。

タチツボスミレ *Viola grypoceras*



花の色が薄いふじ色です。林の中にはなく、かといって原っぱや都市的環境にもなく、林の周辺につかず離れず生えるスミレです。石垣にもよく見られます。

ニオイタチツボスミレ *Viola obtusa*



タチツボスミレに比べて花全体が丸みをおび、花の中心の白いヌケがはっきりしているのが特徴。よい香りがするという人もいますが、あまりはっきりしません。

ニヨイスミレ *Viola verecunda*



花が白くて小さい、目立たないスミレです。半日陰のじめじめしたところに生えます。ツボスミレとも呼ばれます。

以上の8種は、大きく2つのグループに分けることができます。

スミレ、アリアケスミレ、ノジスミレ、ヒメスミレ、シハイスミレの5種は、葉も花柄もみな地面から束になって出ているように見えます。つまりほんとうの茎が伸びません。葉がほこ形(幅のせまい三角形)であるのも共通の特徴です。

タチツボスミレ、ニオイタチツボスミレ、ニヨイスミレの3種は、地上にふつうの茎があって、茎には葉がついており、葉のつけ根から花が出ます。葉がハート形(柄があるからスペード形?)であるのも共通の特徴で

す。

これらの野生のスミレ類のほか、園内では北米原産のアメリカスミレサイシンがみられます。これは植えられたものが野生化したものと考えられます。

また、プランターに植えられているおなじみのパンジーもスミレ科の植物です。ヨーロッパにあるパンジーの野生祖先種がサンシキスミレですが、パンジーも含めてサンシキスミレということもあります。

パンジーの仲間の小輪の品種をビオラ(viola)といいます。上に紹介してきたような野生のスミレ類は英語ではバイオレット(violet)といますが、これは「小さなビオラ」の意味です。

「やはり野におけすみれ草」という言葉があります。「やはり野におけれんげそう」ともいい、こちらがもとかもしれません。花も人も、本来生きるべき環境におかれてこそ生き生きと輝くということです。かわいらしくて気に入ったら、摘み取ったり掘り取ったりして持ち帰るのではなく、来年もまた同じ場所で咲いてくれることを楽しみにしましょう。

今回は、あえて、生えている場所を明示しないことにします。ご自身で出会い、出会えたら大切に見守ってあげてください。

(龍谷大学農学部・三浦励一)